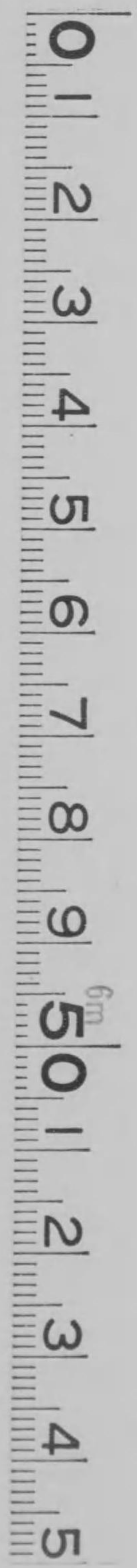




350  
72



始





35  
72

# ゲ-テ語録

東京 大元社 藏版



350-170



ゲ  
テ  
語  
録

大正  
2. 8. 6  
内交



## 緒言

此語録は、ゲーテが晩年の爛熟した思想を断片的に記し留めた冥想録に、新に編者がゲーテの詩文中から抜抄した訓言を附録したものである。

ゲーテは近代稀に見る多角的な巨人であつた。詩に、小説に、脚本に、創作の人として一流の名匠であつた計りでなく、批評家としても、サント、ブウブの云ふが如く批評家の帝王であつた。

而も藝術界に於けるゲーテの努力は文藝の方面にの



み其舞臺を限らなかつた。劇に、繪畫に、彫刻に、建築に、或は手の人として、或は筆の人として、斯道の一人者たるべく充分の資格を有つて居つた。

藝術と科學とは其使徒を異にすべきものであると云ふ定論を打破すべく生れたかの感があるのは、ゲーテである。

ゲーテが科學界に於ける活動は頗る廣い範圍に亘つて居つて、植物學、鑛物學、光學、解剖學、骨學、地質學等、皆其分内のものとせられて居つた。

コンコルドの哲人は云ふ、永劫の老造化もゲーテが

爲めには他に告げぬ秘密までも打明けたと。而も、我がゲーテが造化をして件の特待をなさざるを得ざらしめた、それまでの研鑽は、擧げて宰相が劇務の餘業であつたのである。

ゲーテが科學者としての功績中、重要なものに、顎骨に關する發見と、生態學上の創見とがある、其一だけでも、ゲーテの名を永久に傳へるに足るのである。ヘッケルの言ふ所に據ると、進化論もゲーテが祖師であるさうである。

世間の人としてのゲーテは極めて多幸な、順境に終



始した人であつた。フランクフルトアムマインに於ける辯護士生活は論ずるまでもない短期なものであつた。が、ワイマルに於ける宮廷生活は光輝ある後半生を掩うて死期に及んで居る。

詩人宰相は經世家としても亦超凡な才力の持主であつたといふことを示した。果然アウグスト公の眼識は違はなかつた。

宰相の印綬を解いてからも、文教指導の權は依然としてゲーテの手に握られて居つた。而して、最後の其日に及んだ。

アウグスト公との遭逢は詩人自身のリズムでファウストの第二編に歌はれて居る通り極めて美しいものであつた。

スタイン夫人、シルレル等が友誼、クリスチアヌが貞順、いづれかゲーテが生涯に温い光を投げる天恵でなかつたであらうか。

ワイマルの聖はかくして靜かに頽齡に入つた。

ワイマルは今なほ藝術を愛する者のメツカである。

藝術の使徒として、科學の忠僕としての偉功、世間の人としての成功、偉功は偉功であらう、成功は成功



であらうが、之れは他に拮抗すべき人物がないでもない。

ゲーテが容易く他の企及を許さないのは、其多角的な修養と、其圓滿な人格とである。而して、吾曹が主として注意し、且つ、學ぶ可き所も亦其處にあるのである。

傳記家の云ふ所に據ると、ゲーテは、極めて豊かな天分を有つて生れて來た人であつて、而して、修養の便宜の上に至大な天祐を蒙つた人であつたらしい。

所が、佛蘭西の某外交家は初對面の印象を語つて云

つて居る。

彼は多くの苦悶を経た人らしい、と。

チエルシの聖は云ふ、

彼は勇敢に煩悶を切抜けて來た人である、と。

果然、ゲーテが古今希に見る圓成の人格は多年切磋の結實であつたのである。

思想録の著者として古來有名なのはモンティヌ、ベイコンの二家である。少しく下つては、ラロシュコオル、



パスカルの二家である。

モ、ペの二家が古典的地位は裏書の上に裏書をされて、萬世不壊と信せられて居るのであるが、世紀の波は何物をも洗はねばおかない。今日では、此二家の場合に於ける古典の二字は、頗る骨董のシノニムとして相應しくなつて來て居る。

ラロシュフコオルは世間の人が徒らに抉剔の筆を弄する所に頗る淺薄な臭がある。パスカルはボル、ロワヤルの修道僧が冷い嚴肅な態度で神と人とを語るうちにデリケートなアイロニーがある。活世間の子が親んで

教の泉を酌むには餘りに溫味に乏しい。

ゲーテは此の語録に於て千春萬秋出して盡きざる思想の寶庫を遺した。我が人格のピラミッドを圓成せん願を實現する間の苦心、煩悶より得た實驗、斯の多角的な修養より得た藝術、科學の智識、斯の多面的な活動から學び得た處世の要道、人生の秘密は盡く此裡に藏められて、後世受用の人を待つて居る。

此の語録は圓成の巨人ゲーテが一生の思索のエキスである。これを前四家に比するに、量に於て、廣さに於て、深さに於て、溫味に於て、堅實な點に於て、特



に近代的な點に於て、遙に倫を絶して居る、ゲーテ語録は斯種文學の冠冕である。

美玉を粗瓦にして敢て江湖の賢に進む。

大正二年七月

雨月書屋に於て

編者識

# ゲーテ語録

ゲーテ著  
高野一助譯

重要な問題は既に古人が思索し竭して居る。吾等は只それを再思すべきのみである。

\* \* \*

如何にせば自己が知り得られるか？沈思か？否、依るべきは只躬行のみである。汝の本分を盡すに努めよ。然らば、直ちに自家の眞



面目に參することが出來やう。

\* \* \*

然らば、汝の本分とは何か。他なし眼前日常の要務のみ。

\* \* \*

理性を比すべきものを求めたら、まづ、必然の現象を觀察して、それから、偶然の現象を支配する途を發見しやうとして努力しつゝ、ある、一個の、偉大なる、不滅の人格か。

\* \* \*

自然を征服して、すべての物の爲めに因果の壓迫を除くのが萬物の長としての吾人の至上目的である。然るに、大多數は虚偽の偏見

に誤られて、其將に爲す可き所の事を爲さぬ。而して一度自己の計畫が敗れ、ば、事毎に見るに忍びざる失策を演ずる。予は老いて倍々世を憂へざるを得ない。

\* \* \*

奮闘する者、活動する者に對つて、予は曰はうと思ふ。贏ち得んことを努めよ、期待せよ、

貴人よりは

眷遇を

有力家よりは

庇蔭を

活動家及び善人よりは

推獎を

多數よりは

好意を



簡人よりは

愛を

と。

汝の友とする所を云へ、然らば、予は汝の爲人を語らう。汝の努力する所を語れ、然らば、予は汝の未來を告げやう。

\* \* \*

人は皆自分の流儀によつて思考するの他ない。人は自分の走る軌道に於て常に眞理を看、眞理に似たるものを看得て、而してこれに依て、處世の上に助を得るものなのである。唯放漫を警めねばならぬ。檢束する所がなくてはならぬ。本能ばかりでは人間らしき行動

はならぬ。

\* \* \*

節度のない活動は失敗の準備である。

\* \* \*

人間の事業でも、造化の事業でも、觀察は、主として動機の如何からしなくてはならぬ。

\* \* \*

人は、手段と目的とを轉倒して考へることが多い。而して銳意努力した上で、終に何等の得る所がないか、またはした事が意外の結果に終ることがあると、嘗に自ら誣る斗りでなく、他をも怪むもの



である。

\* \* \*

己れの意志、意向だに純潔無垢ならば、よし俗世に交るとも、甚しき失敗を演ずる虞はない。されば、吾等は斯の心を以て警世興俗の力を飽くまで揮はねばならぬ。

\* \* \*

全部でなくともよい、半、若しくは其の半でもよい、從來の誤信を矯正、芟除して、眞理を闡明すれば、爲し得なくはないが、而も多大の困難と煩累とを免れぬ。

\* \* \*

眞理は必ずしも具象、體現するに及ばぬ。精靈の如く周圍に浮在して、和諧を生ずれば足りる。梵鐘の響の如く、沈痛に、溺々と、大空に響けば足りる。

\* \* \*

空漠たる觀念をもてる者と、自負心弱き者とは、必ず恐るべき失敗を演出する。

\* \* \*

笛は只吹いた斗りでは鳴らぬ。指を當てねば妙音を成さぬ。

\* \* \*

植物學者は一種の植物に不完全花屬といふ名を命じた。人間にも



これと同じ名を命せらるべき不具不完全な者が必ずあらう。冀望や、努力やと自己の實際の活動が平衡を保たぬ者が、即ちそれであらう。

\* \* \*

天分は薄くとも、それを守つて、能ふ限りを盡せば、能く完全人たることが出来る。俊才であつても、缺く可らざる平衡を缺けば、折角の才能も用を失して、終に失敗に淪しむことを免れぬ。これは近代人に屢々見る失敗である。實際現代の如く充實したる白熱的な時代に、急轉直下の勢を以て推移する時勢の要求を充分に充し得るものは、恐らくあるまい。

\* \* \*

現代に成功し得るものは、只自分の力を知つて、これを用ふるに節制と思慮とを以てする智者のみである。

\* \* \*

實際よりも己れを買被ると、實際よりも己れを卑く見るとは、兩ながら大なる誤りである。

\* \* \*

予は向上進歩の見込なき青年に邂逅することが屢々あるが、これは憂としない。却つて世の風潮の動くまゝに動く者の多いのを憂とする。従つて常に予は、かゝる者に對つて、警告したいと思つて居る、



曰く、脆弱な舟に棹して浮んで居る此人類が、橈を神から授けられたのは、これは他でない、人、各々、自己の心眼の見る所に従つて走らんが爲めである。浪のまに／＼浮ばんが爲めではない、と。

\* \* \*

されど弱輩の身としては、世人が盡く實行し、可とし、助成して居る所を、不可と見、有害なりと見ることが難いのも尤もである。自己と自己の本性とを擧げて他と共に流に漂ふ可らざるの理を見得ないのも尤もである。

\* \* \*

何物をも成熟せしめざらんとするのが現代である。今の時と前の

時と相逢うて、而して、一日は一日と空しく消えて行く。吾人は何等の成す所なくして、徒らに日を送迎するに追はれて居る。これは現代特有の大禍である。予はしか信せざらんとするも得ない。既に時々刻々の新聞が有る上に、伶俐な者はなほ一二の新聞を其の間に起すことが可能であるといふ。而して、世人の爲す所、努むる所、思考する所、然り、其企圖する所さへ、これによつて公にされる。悲喜共に明日は世人の娛樂に供せらるゝを免れぬ世の中である。家より家へ、町より町へ、國より國へ、相傳へられて、之れが、遂に大陸より大陸へ傳はり、相混淆して紛々となる、これが現代なのである。



\* \* \*  
蒸汽機關に煙を吐かせまいとするのは困難だ。吾人が心靈の力を  
押し盡すとも亦それと同じく困難だ。されば、商業の繁盛、絶えず  
起る紙幣の音響、舊債を償却せんが爲めに積む新債の堆、これが今  
日の青年の踏み入らねばならぬ恐ろしき世間であるとしても、冷靜、  
平和の頭腦を生れながらに享け得た者であつて、而して社會に過大  
の要求をなすことなく、また、自己の地位を社會の決するに委する  
ことなきを得るものがあらば、吾人は彼が爲めに手を額に當て、慶  
することが出来る。

\* \* \*

然れど、青年は時代精神の爲めに四方より壓迫を受けるものであ  
る。自己の天稟の何れにあるかを早く知らしむるに如くはない。

\* \* \*

極めて無邪氣な言行も其人の年齢の如何によつては異つた意義に  
解せられる。故に、予は、周圍の人々に向つて、常に率直と、親し  
みと、淺慮と、三者の間に大なる差異のあることを指摘して居る。  
元來此三者は殆んど同一である云つても差支ない行爲であるが、  
唯、初めは極めて罪のない行爲であつたのが、漸々極めて害のある  
行爲に變じたのである。而して、其變化たるや、注目して始めて知  
るべき、否寧ろ感じて知らるべき變易なのである。



\* \* \*  
茲に於てか、吾人は、機智を働かすの要がある。然らざれば、初めに他人の好意を得るの具となりし行爲が、自ら知らぬ間に、其の好意を失ふの具となつて、意外の危険に遭遇することがある。これは、云ふまでもなく、吾人が生涯の間に自ら経験して學ぶべき教訓である。而も、其の實驗には多大の代償を拂はねばならぬのである。吾人には、遺憾ながら、此代償を拂ふの煩を子孫の爲めに除く力がない。

\* \* \*  
藝術、科學對人生の關係は、前兩者の發達程度、及び時代の情勢

等、種々の事情に由つて、大差がある。従つて、全般に亘つて此の關係を明瞭に解するのは、何人を以てしても、容易の業ではない。

\* \* \*  
詩が最社會に勢力を揮ふのは社會が未だ野蠻の狀態を脱せざるか、若しくは漸く半開の域に達したるか、孰れにするも幼稚の時代にある時ならざれば、其文化が過渡期にありて、或る新らしき文明、又は、外來の文化に接觸せんとしつゝある時に多い。之れによつて見れば、清新なるものは必らず著大の効果を現はすものであると云ふことが出来る。

\* \* \*



音樂の最高なるものにあつては、清新を要することが、詩ほど甚しくない。時を経て耳に熟すると共に却つて倍々効果が多くなる。

三〇

藝術の威嚴は音樂に於て最もよく示されて居るらしい。何故かとなれば、音樂には、材題等の助が比較的少い。音樂は全く形式ばかりの藝術である。而して、其の評價は純評價である。表現された者は、何ものであつても、凡て壯美になる、崇高になる。

三〇

音樂には聖俗の別がある。音樂本來の威嚴は宗教的空氣に近似して居る。従つて、兩者の結合した音樂は、深妙なる影響を人生に與

へる。而して、其の影響は、すべての時と、すべての時代とを通じて、變化がない。俗の音曲は、本質上、軽く、且つ、快活なるべきものである。

\* \* \*

宗教的性質と俗樂的性質とを併せた音樂は、前者ともつかず、後者ともつかぬ瀆神的音樂である。弱く、暗き、悲愴の感を表現して以て快とする音樂は、宗教的なるには餘りに嚴肅ならず、それと反對の樂たるには、根本的特質、即ち、輕快の趣を缺けるが故に、殆んど鑑賞に値しない。

\* \* \*



寺院樂の崇嚴と、俗曲の輕快とは、真正の音樂の依て立つ所の根

底である。されば、此二の根底によつて、即ち、信仰と舞踊とを基礎として、起つた音樂は久遠に不壞の効果を有する。が、複雑に過ぐれば、徒らに聽者を惑すのみで、さしたる効果を現さぬ。教訓詩、叙事詩の如きは、歌曲に合すれば、枯淡に墮するの他ない。

\* \* \*

彫刻は其技術が極致に達したる時始めて眞の効果を現し得べきものである。劣等の作品とても、種々の原因からして幾分か的印象は與へるが、此種の劣等藝術品に限つて、看者に悅樂を味はせないで、却つて、惑を起させるものである。従つて、興味ある材題を採つて、

此の缺點を補ふの必要が生じて來たのである。而して、一般に名流の像を絶好の材題と認めて居るやうである。が、なほ、眞あり威嚴ある作品を得るには、高級の技術に俟たねばならぬ。

\* \* \*

畫家は利潤の多いといふ點と、氣樂なといふ點に於て藝術家中の首位に居る。其の商賣的なる一例を云はゞ、一種の商品と認むるの他ない、どうしても美術品の名を以て呼び難いやうな作品すら、鑑賞上に多大の斟酌を受け、甚しきは、材料と畫題との爲めに賞美せらるゝことさへある。また、一面に於ては、有識者も、無識者も、一様に、作品に生命の存すると存せざるとを鑑識しないで、只一片



の技巧の見るに足るものさへあれば、直ちに讃嘆の聲を惜まない。其結果として、作品が聊でも藝術的水平線に出て居れば、實價以上の讃辭を以て世間に迎へられるやうな傾向もある。實際、色彩や、平面や、物象相互の關係や、これだけでも、表現の仕方によつては、既に快感を與へる力がある上に、眼は、實際に於て、何でも無差別に見る習がついて居るからして、不具の物や、不具の繪畫を見ても、耳が雜音を聞いて不快を感じないと同様に、毫も不快を感じない。世人も、平素一層醜惡な實世間に目を晒し熟けて居るから、劣惡極まる繪畫を見たとして、敢てこれを嫌惡しない。従つて、聊か藝術の堂を窺つた畫家ならば、同程度の技術を有する音樂家よりもよ

り多くの顧客を得るに難くないのである。畫家は、技倆が鈍くても、獨力で製作に従事することが出来るが、二流の音樂家となると、自家の技能を賣る前に先づ他人を誘つて事を共にする策を立てねばならぬといふ不利がある。

\* \* \*

美術品を鑑賞する時に比較を試みるの可否如何といふ問題を提起する者があらば、予は對へて云はうと思ふ。素養ある鑑賞家は、藝術家の實際の力量と其藝術家に對する自己の期望とを概念化して、而して其を常に心に持つて居るので、比較を試みざらんとしても得ぬ。が、素人で、現に鑑賞力を養ひつゝある者は、箇々の美を觀照



して、而して、漸次に普遍的價値を鑑識する力を養ふ方が利益であるからして、比較を試みぬ方がよからうと思ふ。全く素養のない者には、自分で批判を下さねばならぬ煩勞を免れるのに比較は最もよい便法である。

五下と三

人に眞を愛する念があるといふことは、凡ての物に美を發見して、それを尊重する傾向があるので明らかである。

現代の事件を観察して其是非善惡を判斷するに方つて的確に過去の事實を參酌し得る者は史的觀念があると謂へる。

下

歴史を讀んで感奮し得た者は讀史の利益の最大なるものを得たのである。

品性は品性を造る。

世間には創造の才もないに強ひて變つたことが云つて見たいと云ふ者がある。極めて珍奇な作品が世に多く現れるのは之れが爲めであるといふことを記憶して貰いたい。



有人の他人

深く真面目に思考する者と、俗世間とは、圓滑に行かないのが常である。

\* \* \*

他人の意見を聞くからには、確乎たる言が聞きたい。疑惑は、自分の心中にも、既に、充分藏めてある。

\* \* \*

迷信は人性の要素で、決して退治し盡せるものではない。全く驅逐し得たと考へて居ると、何時か、思ひもよらぬ隅に遁れて、隙間に匿れて居る。而して安全であると信じられる時が來ると、忽然、身を躍らして、再び現れて來る。

\* \* \*

予は、世俗を惑すことを好まぬ。また、窘めることも欲しない。また、世人が予の不快とする所を快としても、毫も意に介さない。故に、大抵の問題に就ては沈黙を守つて居る。

\* \* \*

自制の力を與へないで、靈を解放するのは、一利なくして、百害がある。

\* \* \*

藝術的作品に對する世人の感興は、何？の方が、如何に？に對するよりも遙に強い。これは、何人にも前者は解し得られるが、極



めて少数の他、後者を解し得る者が無い爲めであらう。局部を誇張する法は即ち茲に起つたのである。夫故綿密に局部を看察すると、何人の眼にも入らぬやうな處にも、其處に矢張統一的效果を生じた要素が発見せられるのである。

\* \* \*

何處より詩人は斯の如き詩材を得來つたのかと、此問は只何？  
にのみ交渉する。如何に？ に至つては世人の知り得る所でない。

\* \* \*

想像力は藝術、殊に、詩の感化によつて始めて節制あるものとなるのである。趣味の伴はぬ想像力ほど怖るべきものはない。

\* \* \*

詩人の生命は表現である。而して、表現は、實際と眞を争ふ時、即ち、叙事が靈活で、精彩があつて、これを讀む者が恰も現實を目睹するが如き想をなす時に於て、其極致に達する。故に、詩が極致に達したる時は、純客觀的なるかの様な觀がある。それが主觀に傾けば、傾くほど、價值が低下する。客觀的形體に寓するでもなく、また、主觀を通じて客觀を感せしむるでもなく、唯主觀的事象のみ表白せうとする詩は、一般に云ふ詩と、凡常事象との中間に位するものである。

\* \* \*



修辭は詩の有する凡ての權利と特權とを僭用せんとするものである。而して、其がこれを押領し、濫用するのは、唯日常生活の上に於て、或は精神的に、或は然らざる方面に、刹那の外面的効果を收めんとする目的に出でたのである。

\* \* \*

バイロン卿の才は、其發達の仕方が、亂調子で、なだらかでなかつたが、併し、天真な而して偉大な境に達した才である。此點に於ては世に一人の卿に匹敵すべき者が無い。

\* \* \*

世に謂ふ所の俗謠は其想を直ちに自然から得たといふ所に根本的

價值があるのである。専門的詩人も亦這般の理をだに解しきへすれば、これと同じ利を收むることが難くない。

\* \* \*

然れど、専門的詩人には一の不利がある。普通人は鍛鍊を経たる士よりも表現を簡勁にするの術に於てより多くの技巧を有して居る。

\* \* \*

歴史ある者でなければ史的批判を下す資格がない。これを一箇の國民に見るもさうである。國民文學が出来たから、獨逸も今では稍文學を談じ得る次第である。

\* \* \*



人は、他人の真情が喜べた時、始めて、真に活きたりと謂へる。

\* \* \*

信心は、手段である。目的ではない。極めて潔い安心を得て、よつて最高の修養を成就せんとする者の探る可き手段にすぎない。

\* \* \*

信心を以て最終の目的とし、終極と立てたる者が多くは偽善の徒となるを見れば、思ひ半にすぐるであらう。

\* \* \*

老境に入らば、若かりし時よりも、より多く活動せねばならぬ。

\* \* \*

義務は、如何に完全に果しても、己れの心を充分に満足せしむるまでにはいかぬ。従つて、何處までも負債のやうな感のするものである。

\* \* \*

愛に曇らぬ眼で見て始めて他の短所が知れる。故に他の短所を知らんとするものは、先づ自分の心を冷やかにする必要がある。されど度を失しては害がある。

\* \* \*

己れの短を補ひ、且つ過を正し能ふといふことは、人生の幸福の最も大なるものである。



して、而して、漸次に普遍的價値を鑑識する力を養ふ方が利益であるからして、比較を試みぬ方がよからうと思ふ。全く素養のない者には、自分で批判を下さねばならぬ煩勞を免れるのに比較は最もよい便法である。

\* \* \*

人に眞を愛する念があるといふことは、凡ての物に美を發見して、それを尊重する傾向があるので明らかである。

\* \* \*

現代の事件を観察して其是非善惡を判斷するに方つて的確に過去の事實を參酌し得る者は史的觀念があると謂へる。

下々

歴史を讀んで感奮し得た者は讀史の利益の最大なるものを得たのである。

\* \* \*

\* \* \*

品性は品性を造る。

\* \* \*

世間には創造の才もないに強ひて變つたことが云つて見たいと云ふ者がある。極めて珍奇な作品が世に多く現れるのは之れが爲めであるといふことを記憶して貰いたい。

\* \* \*



予人 俗人

深く眞面目に思考する者と、俗世間とは、圓滑に行かないのが常である。

\* \* \*

他人の意見を聞くからには、確乎たる言が聞きたい。疑惑は、自分の心中にも、既に、充分藏めてある。

\* \* \*

迷信は人性の要素で、決して退治し盡せるものではない。全く驅逐し得たと考へて居ると、何時か、思ひもよらぬ隅に遁れて、隙間に匿れて居る。而して安全であると信じられる時が來ると、忽然、身を躍らして、再び現れて來る。

\* \* \*

予は、世俗を惑すことを好まぬ。また、窘めることも欲しない。また、世人が予の不快とする所を快としても、毫も意に介さない。故に、大抵の問題に就ては沈黙を守つて居る。

\* \* \*

自制の力を與へないで、靈を解放するのは、一利なくして、百害がある。

\* \* \*

藝術的作品に對する世人の感興は、何？の方が、如何に？に對するよりも遙に強い。これは、何人にも前者は解し得られるが、極



めて少数の他、後者を解し得る者がない爲めであらう。局部を誇張する法は即ち茲に起つたのである。夫故綿密に局部を看察すると、何人の眼にも入らぬやうな處にも、其處に矢張統一的效果を生じた要素が発見せられるのである。

\* \* \*

何處より詩人は斯の如き詩材を得來つたのかと、此問は只何？

にのみ交渉する。如何に？ に至つては世人の知り得る所でない。

\* \* \*

想像力は藝術、殊に、詩の感化によつて始めて節制あるものとなるのである。趣味の伴はぬ想像力ほど怖るべきものはない。

\* \* \*

詩人の生命は表現である。而して、表現は、實際と眞を争ふ時、即ち、叙事が靈活で、精彩があつて、これを讀む者が恰も現實を目睹するが如き想をなす時に於て、其極致に達する。故に、詩が極致に達したる時は、純客觀的なるかの様な觀がある。それが主觀に傾けば、傾くほど、價值が低下する。客觀的形體に寓するでもなく、また、主觀を通じて客觀を感せしむるでもなく、唯主觀的事象のみ表白せうとする詩は、一般に云ふ詩と、凡常事象との中間に位するものである。

\* \* \*



修辭は詩の有する凡ての權利と特權とを借用せんとするものである。而して、其がこれを押領し、濫用するのは、唯日常生活の上に於て、或は精神的に、或は然らざる方面に、刹那の外面的効果を收めんとする目的に出でたのである。

\* \* \*

バイロン卿の才は、其發達の仕方が、亂調子で、なだらかでないが、併し、天真な而して偉大な境に達した才である。此點に於ては世に一人の卿に匹敵すべき者がない。

\* \* \*

世に謂ふ所の俗謠は其想を直ちに自然から得たといふ所に根本的

價值があるのである。専門的詩人も亦這般の理をだに解しきへすれば、これと同じ利を收むることが難くない。

\* \* \*

然れど、専門的詩人には一の不利がある。普通人は鍛鍊を経たる士よりも表現を簡勁にするの術に於てより多くの技巧を有して居る。

\* \* \*

歴史ある者でなければ史的批判を下す資格がない。これを一箇の國民に見るもさうである。國民文學が出来たから、獨逸も今では稍文學を談じ得る次第である。

\* \* \*



人は、他人の眞情が喜べた時、始めて、眞に活きたりと謂へる。

\* \* \*

信心は、手段である。目的ではない。極めて潔い安心を得て、よつて最高の修養を成就せんとする者の採る可き手段にすぎない。

\* \* \*

信心を以て最終の目的とし、終極と立てたる者が多くは偽善の徒となるを見れば、思ひ半にすぐるであらう。

\* \* \*

老境に入らば、若かりし時よりも、より多く活動せねばならぬ。

\* \* \*

義務は、如何に完全に果しても、己れの心を充分に満足せしむるまでにはいかぬ。従つて、何處までも負債のやうな感のするものである。

\* \* \*

愛に曇らぬ眼で見て始めて他の短所が知れる。故に他の短所を知らんとするものは、先づ自分の心を冷やかにする必要がある。されど度を失しては害がある。

\* \* \*

己れの短を補ひ、且つ過を正し能ふといふことは、人生の幸福の最も大なるものである。



\* \* \*

読み得るからには、解し得る筈である。書き得るからには、何事にせよ知つて居る筈である。信ずるからには、悟つたに相違ない。欲するからには、取るの勞をせねばならぬ。

\* \* \*

要求すとあるからには、得やうとは思ふまい。老練なりとあらば、他の爲めに用をなすべき筈である。

\* \* \*

經驗を信じて之れにのみよつて行動する者の行爲には充分の眞理がある。成長の途にある兒童は、此意味に於て、賢者である。

\* \* \*

されど、斯の事實は單に現象相互の關聯を肯定せしむるのみで、他に何等の効はない。

\* \* \*

抽象的觀念は實際に適用して始めて知力の把握に適するやうになり、知力は又作用し、觀察して抽象的觀念を作る。

\* \* \*

欲求の強いものと事を好む者とは過ち易い。

\* \* \*

類推法を用ひて思考するのは決してわるくはない。燥急に議論を



收結しないから、従つて夫れに伴ふ利益がある上に、眞の結論若しくは眞の断定らしい偽結論や偽断定やが妨げをする虞がなくてよい。然るに、歸納法は、豫め一の目的を立て、其方向に論を進めるのであるからして、眞をも、偽をも、一併に片付け去るの害がある。

常直覺、即ち、世事に對して正しき見解を下す能力は太初以來の人類の智が遺した財産である。

内外兩界を洞察し得る純直覺を具備した者は極めて稀である。

\* \* \*

前者は世智に現れ、實際に現れ、後者は、象徴的に、殊に、數學、及び、人智の俚諺とも稱す可き天才の詩などに見る韻律、形式、及び原始的にして、且つ比喩的なる言語に、現はれる。

視野外にあるものは、傳説の媒介によつて、吾等に影響を與へるのである。而して、其普通の類型に屬するものはこれを史的と稱し、想像力に交渉ある一段高き類型に屬するものはこれを神話的と稱することが出る。また更に進んで何等かの意義を有する第三の類型を求むれば、其處に神秘的類型とも云ふべきものが出る。而して、較もすれば感傷的色彩を帯びたがる。吾等は只自己の趣味に合する



限りに於て其影響を受入れるのみである。

出で、活動する時にも、入つて考索する時にも、可能事と不可能事との差別を嚴重にせねばならぬ。這般の用意を缺く者が、實際生活に於いても、智識の上に於ても、遂に何等の成す所なくして終ることは、云ふまでもない。

常識は人類の守護神なりと。斯く人類の守護神とまで見られた常識なるものを研究しやうとするには、先づこれを其人事に表れた上に於てしなくてはならぬ。人類の常識を驅使する目的如何と見るに、

略々次の如くである。人類は慾求に限定されて居る。慾求が充されぬ時は懊惱する、が、充されるれば忘れたるかの如く平然として居る。人類は此兩境の間に彷徨して、自己の慾求を充さんが爲めに、其智力を役し、謂ふ所の常識をも用ふるのである。而して、欲する所を得了つた時、即ち餘閑消遣の問題が擡頭するのである。慾求の目的とする所が緊切にして缺く可らざるものに限られ、ば、確實にこれが得られるが、求むる所が過大に失して、尋常慾求の範圍を逸して居れば、常識の力ではこれを如何ともし難いからして、守護神も遂に其力を失つて、吾等は過の淵に墮することを免れぬ。



如何なる失錯にても、智慧を用ひて、巧に機會を利用すれば、償ひ得ぬことはない。如何なる神算も他の不明若しくは不慮の出來事の爲めには狂を生ずることを免れない。

\* \* \*

偉大なる思想が始めて世に出づる時の勢は實に凄じきものがある。而して、それが、其の齎したる利益の忽ち害毒視せらるゝに至る原因をなして居るのである。従つて、其の世に出でたる初に溯つて考へて、初に是認の理由となつた事實が今もなほ依然として其の思想の眞を語つて居ることが判つたならば、如何なる惡制度でも、如何なる惡思想でも、充分賞讃するの餘地があるのである。

\* \* \*

制限の多きに窘んでか、レッスンは、劇中の人物に言はせて居る。人は自分の意志によつて自由に行動し得るものではないと。伶俐にして好人物なりし某が、或時、これに就いて曰ふ、意志した以上必らず之を行爲に現さねばなるまいと。また、慥に教育ありと見えたる人が、語を挟んで曰ふには、理解する處必らず意志が之に伴ふものであると。智と、意と、必至と、此三者の關係は之れで説明し竭されたと考へられたらしかつた。が、人の智識は、爲すべき所と、爲すまじき所との定めをつけるものである。されば、行爲に無智の痕迹が現れたるより恐るべきものはない。



\* \* \* \* \*  
平和の因子となるべき力が二ある。一は、正義の感で、一は、合  
宜の感である。

\* \* \* \* \*  
正義は義務を強ひ、法律は合宜を強いる。正義は鑑別し、且つ、  
辨別し、法律は支配し、且つ、命令する。正義の交渉する所は箇人  
で、法律の交渉する所は社會である。

\* \* \* \* \*  
智識の歴史は種々の國民の聲が相次いで旋律の上に現れて來る、  
一の大なるフウガ樂と見ることが出来る。

\* \* \* \* \*  
人として爲す可く期待された事を盡く果さうとするのは、それは、  
自分の力を過大に見たる結果である。が、而も、妄想が甚しきに至  
らぬ間は、吾等は喜んでこれを恕さんとする者である。

\* \* \* \* \*  
仕事は友を造る。

\* \* \* \* \*  
世には他人に智識を供給する目的を餘所にして唯々學識を銜はん  
が爲めに著はしたとしか見えぬ書物が往々ある。



根據の薄弱な假定を眞理なるかの如く信じて其處に強ひて安心を求めやうとするのは、心の安不安より云はゞ、絶對的虚偽を信じて、これに惑溺するの勝れるに如かぬ。

\* \* \*

○讀者の期待する所のものを供給するよりは、當時に於ける自己及び公衆の修養程度を目安として、姑く自己が正當と思ひ、適當と見た所のものを公にする方が、著者として讀者に深厚な同情を拂つた者である。

\* \* \*

智は只眞にのみ存する。

錯を犯した時は、何人も直ちにそれと知るが、僞つた時は、然うでない。

\* \* \*

極めて單純な現象をまで謎化さすとも、世界夫自身既に謎に充ちて居るではないか。

\* \* \*

浮いた傾向に誤られた結果として従來爲し來つた事を、予は今になつて始めてそれと識り得た。

\* \* \*



寛厚の徳ある者は何人にも好意を獲る。謙讓の徳を併せ有する者は殊に然うである。

暴風雨の將に來らんとする前には、霎時しはらくすれば永く地面に濕り著けられる筈の塵埃が、猛烈に立つ。

如何に雙方の意志が其處にあつても、人は容易に相識り能ふものではない。適く相識り得ても、少時の後には、不快の念が其間に兆して、さきの努力を水泡に歸せしむるのが常である。

人は競ふ心が相互になれば、容易に理解し合へるのである。

民衆は競ふ事の不可能なるを知るものから、嫉妬の眼を以て嚴重に名士の平生を監視する。従つて、名士の地位は平人のそれに比して遙に困難である。

處世上より云へば、強ひて人を理解する必要はない。其時其場に居合せたる者より怜悯に立廻れば事足るのである。縁日商人、香具師等が、其の好例證である。



外國語を知らぬ者は自國語をも知らぬ。

\*

\*

\*

若い時過を犯すのは可い。老いてまで其過を改めぬのはよくない。

\*

\*

\*

戲言、秀句の類は、陳ふるくなると、甚しい愚言になる。

\*

\*

\*

自然は、種を造る時、死巷に紛れ込んだ、そして、一步も進むことが出来なくなつた、が、矢張戻ることを快しとしなかつたものに見える。それが爲めか、國民性は永遠に變化しない。

\*

\*

\*

人は皆、自分の性質のうちに、口に出して云へば、自分さへ不快を感じるやうな分子を含んで居るのである。

\*

\*

\*

省みて、自己の身體若しくは精神の状態を察みれば、大抵は自己の不健全なるを發見する。

\*

\*

\*

自然の要求として吾等は時々覺めながら夢ゆめねばならぬ。煙草を喫し、ブランデーを飲み、阿片に耽つて、而して、快感を覺えるのは、此處の理である。

\*

\*

\*



眞に有爲の才ある者は正理を行はんとのみ心掛けて、爲し終つた事の正しかりしか否かを顧慮せぬを可しとする。

\*

\*

\*

槌を以て濫りに扉を打ちながら、打つ毎に釘頭を打ち得たりと信じて居る者が多くある。

\*

\*

\*

自然の反影とも認められず、また、一時的變相とも認められざる偶然の眞理をばこれを平凡と云ふ。

\*

\*

\*

紅粉を粧つたり、文身を誇つたりするのは野獸の昔に復歸せんと

するに等しい。

\*

\*

\*

修史は過去を葬る一の方法である。

\*

\*

\*

理解せずは有する物も有せざるに等しい。

\*

\*

\*

含蓄ある觀念を得たればとて必らずしも創作の才は具りはせぬ。

大抵の場合には既知の或事實が之れによつて想起さるゝに止るやうである。

\*

\*

\*



特權を利用して恩惠を施すのは弱主のなすべきことである。

\* \* \*

日常茶飯の事で典雅な語を用ひて言つてもなほ滑稽に聞えぬやうな事としては一もない。

\* \* \*

吾等は何時でも自己の信念を實現し得る力を有つて居る。

\* \* \*

判断力さへ同時に消滅せずば、記憶力は失つても差閤ない。

\* \* \*

自然詩人とは、洗鍊に過ぎて型に陥つた舊技巧があまりに銜氣に

富めるに慊らずして起つた活氣ある新詩人を云ふのである。彼等とて、技巧を排する結果として、或は枯淡に陥つたり、平凡にすぎたりすることゝとよりあらう、従つて、退歩であると云ふ非難をさるゝこともあらう。が、彼等は新に生れたるものである。進歩の先驅である。

\* \* \*

如何なる國民でも自己を批判し得るやうにならねば、判断の能力が出来たとは云へぬ。が、此處に到達するには、幾多の徑路を經來らねばならぬ。

\* \* \*



猥りに予の説を駁すよりは、予が心を心として行動した方がよい。

\* \* \*

眞理を抑へるのは濫りに火を搔立てるに等しい。濫りに火を搔き立てると、餘燼が散亂して、燃ゆべくもあらぬ物にまで火が移る。

\* \* \*

○人類も、此世界を小なりとするほどに自ら重んぜねば、萬物に長たりとは云へぬ。

\* \* \*

一度發見された事の、後、新に埋没した例が多くある。慧星の定期律を確定する爲にタイコ、ブラーエの費した苦心は實に漠大なも

のであつた。而も、それは遙か以前にセネカが既に認めて居る。

\* \* \*

些の價值もないがさりとて全く悪作であるとも定め難い作品を今日では製作し得るのである。斯る作品は内容が空虚であると云ふ點から云へば價值がない。が、型を知つて居る作家の頭腦から出たものとするれば全然悪作とも云ひ難ひのである。

\* \* \*

思想を恐るゝ者は、遂に何等の觀念をも作らずに終るのである。

\* \* \*

常に接觸して益を受ける人は師と稱するが至當であるが、何等か



の教を受けたればとて、それを盡く師の稱號に値すと見るのは不可である。

叙情詩の類は、孰れも、全體に亘つては合理的に、局部に於ては少しく非合理的にあるべきものである。

人の性は海のそれに比することが出来る。海は種々の名を負はされつゝも、其鹹水たることは失はぬ。

世人は謂ふ、自畫自讚は、臭、鼻を撲つと。或は然うあらう。が、

世人は、他に冤罪を與ふる者の放つ惡臭を嗅ぐ鼻を全然有つて居らぬらしい。

小説は主觀的史詩で、作家は自家の方式に従つて人生を解説せんとする者である。されば、唯、作家に自家の方式があるか、否かの一事が問題になるのみで、之れがありさへすれば、他は自ら成るのである。

世には如何なる地位を得るも其地位に適せず、如何なる地位を得るも其地位に満足せざる、解す可らざる性質の人がある。すべての



快樂を褫つて生涯を荒涼ならしむる恐しき懊惱に苦むのは斯る性質の人に多い。

\* \* \*  
眞の善行は概ね他人の要求、強請、若しくは哀求に會つて後行つたものである。

\* \* \*  
太陽これを照せば塵埃も亦耀く。

\* \* \*  
水車の持主惟へらく、天下の麥は我家の水車を運轉するが爲めに實るのみと。

\* \* \*  
一日をさへ正しく理解することは困難である。平凡なれば、退屈であると思ひ、善き日なれば事が多くて煩しいと思ひ、悪しき日なれば苦しいと思ふ。

\* \* \*  
終から始へ自分の生涯の事歴を溯つて考へて其處に一貫した主張を發見し得た者は最も幸福な者である。

\* \* \*  
人は、頑固で、反感的である。従つて、己れに有利であると知つても、他より強ひられたことは爲やうとしないで、己れに不利であ



ると知つても、他に止められたことは遂げやうとする。

\* \* \*

先見は單純である。後悔は多端である。

\* \* \*

日毎に新しく面倒を惹起すやうな事態は必らず自然的でないのである。

\* \* \*

淺慮の人から見れば、己が淺慮から起つた禍を避ける策に焦慮するより尋常なことはないのである。

\* \* \*

進んで意見を吐くのは將棋盤上に駒を進めるに等しい。駒を進めれば、駒は敵に獲られるが、而も、それが爲めに後に至つて利を得る手が開ける。

\* \* \*

誤謬と、眞理と、其の源が同じであるといふとは、不可思議に聞えるが、慥に事實である。従つて誤謬を猥りに滅ぼさうとすると、同時に眞理を害するところがある。誤謬を滅ぼしてならぬ場合が往々にしてある。

\* \* \*

眞理は箇人にあつて、誤謬は時代にある。非凡の能力の有つた某



に就て云つた語がある。曰く、彼は時代の悪弊に過たれて誤謬を犯したが心靈が強大であつた、めに遂に其誤謬を償ひ得たと。

人各々癖がある。而して、こればかりは、如何にしても、去るこ  
とが出来ぬ。然も、吾等が失敗の原因を成すものは多く此の癖で、  
殊に最も他愛なき癖である。

自負せざる者は自ら信するよりも大なる人物である。

藝術にしても、學問にしても、企業若しくは實務と毫も變つた所

はない。成否は一に、目的を分明に解すると否と、及び、これを遂  
行するに自然的方法を以つてすると否とにある。

聰明にして思慮ある人は、老境に赴くに從つて知識を輕んずる傾  
向がある。これは知識に對し、自己に對して、要求する所が嚴に過  
ぎた結果に他ならぬ。

徒らに人生の無常を嘆じ、猥りに現世の希望の空虚を悲んで居る  
者は實に惘然である。吾等が此世に生れ出たのは、唯々斯の無常を  
變じて常往となさんが爲めで、而して、無常、常往の二境が見得れ



ば、これは容易に成就し得るである。

\* \* \*

初めて見る彫像からは、自分にそれを味ふだけの鑑賞力がなかつた爲めか、毫も感興を得られぬところが、往々あつた。今でもさういつた事が屢々ある。それでも、其の作品に佳良の點があると認めれば、自分はその美が那邊にあるかを知らうとして努力した。而して、それが爲めに、極めて愉快な発見をなし得たことが屢々ある。作品には新しい美を発見し、自分には新しい力を発見した。

\* \* \*

信仰は蓄財にも譬へられ、ば、貯蓄銀行、若しくは、典當舗にも

譬へられる。一朝事があれば、これが爲めに助を得ることがある。が、此際、此債主は、人知れず、利子を取つて居る。

\* \* \*

的確に云ふ時は、非研究主義とは、真正で、明白で、そして、世用をなす知識を流布させまいとする努力を云ふのではなくて、虚偽を弘めやうとする活動を謂つたのである。

\* \* \*

永い間種々の人物の傳記を研究して居る間に次の如き感想を得た。

\* \* \*



人生を織物に譬へて見ると、経糸に比すべき人もあり、また、緯糸に比すべき人もある。小人は詮するに、人生の織物に横幅を與ふる者、大人は、地を緻密にし、堅牢ならしめ、また、或時は、これに加ふるに、綾をも織り加ふる者である。而して、之れが長さを定める者は、彼運命の女神アトロポスの剪刀である。人は皆これに従はざるを得ない。自分はこれ以上に比喻を進めたくない。

註、アトロポスとは希臘神話中の三司業神の一である。手に剪刀を持つて居て他の二女神の繰出した運命の糸を斷つのが其の職分である。

\* \* \*

書籍にも一々經歷があつて、引離しては考へ難い。

泪を垂れて、麵包を食へることなく、夜すがらを愁に明して、泪ながらに、閨に起きたることなき者、汝を知らず、汝、天津御神よ、

〔ヴキルヘルム、マイステルより〕

此極めてあはれ深い句は、才貌双絶の譽高く、身に一世の尊敬を蒐めさせられながら、運拙くして、限なき歎の淵に沈ませられた、彼のルイゼ王后が曾て愛誦せられた句である。王后は、憂き事多き蒙塵の間、他の諸の悲哀なる經驗を嘗めさせられた、其の餘りに、上に抄出した句を記した書籍をも獲られたのである。而して、これ



よりあはれ深き慰を得させられたのである。斯のやうな染々と考へさせられる逸事を誰か忘れ得られるものであらう。

註、ルイゼ王后とは普魯西の三世フリードリッヒギルヘルムの王后を云ふ。

\* \* \*

眞理は炬火である。而も巨大なる炬火である。世人が眼を屢叩しばたきつ  
つ竊に之れを遣り過して、恰も之れが爲めに焚かるゝを恐るゝが如  
き狀があるのはこれが爲めである。

\* \* \*

聰明な人に多くは聰明ならざる反面があるものである。斯の類の

人は、他人が其意志を表白するに方つて少しく明白を缺くことがあ  
れば、最早これを理解し得ない。

\* \* \*

苛察の弊を脱するには、老いるより他に途がない。

\* \* \*

自分に犯しさうな過でなくては、他人が犯しても看破し得ない。

\* \* \*

活動の人は必らず良心が鈍い。止つて内省する者でなくては、良  
心の鋭敏は望まれぬ。

\* \* \*



平素自分が好意を表して居る人々がある。其人々に對してなほ一層の好意が表せたらよからうと、自分に思ふことがある。

\* \* \* \* \*  
憎悪は積極的の不快で、猜忌は消極的の不快である。されば、猜忌が變じて憎悪となつても驚くには足らぬ。

<sup>音律</sup>  
音律は一種の魔力を有つて居る。崇嚴の極致さへ極めて吾等に近いものゝやうに感ぜしめる。

\* \* \* \* \*  
真面目に努力する好事家と、器械的に研究を續ける學究とは、共

に遂に術學的俗風に墮する。

\* \* \* \* \*  
自ら斯道の巨匠とならねば藝術の興隆は圖られぬ。所謂藝術の保護者なる者は巨匠の補助者たることは出來やう。それは甚だ結構なことである。が、只それだけでは藝術の興隆は期し難い。

\* \* \* \* \*  
世上に過も多いが、前人の認めた眞理を承認するのを自己の創意を棄つるものなるかの如く思惟する青年の過ほど愚なものはあるまい。

\* \* \* \* \*



學者は、他を説破しやうとする時に臨むと、多くは疾惡の念を生じて、論敵を宿仇の如く疾視するやうになるものである。

\* \* \*

美は明らかに自覺し難いものである。

\* \* \*

主観詩即ち所謂感傷詩に客観詩即ち叙事詩と同じ位地を與へたのは斯くせねば近代詩壇の傾向を盡く非としなければならぬ爲め已むを得ずして採つた處置であるが、之れが爲め、今日では、眞に詩才ある者が現れても、多くは人生の大觀を歌はないで却つて内的生活に現れた情操と感情とを歌ふが如き傾向が明らかに生じて居る。而

して此の傾向が既に大いに熟した。目今では象喩を缺いた詩歌さへある勢である。此一派の詩がまた決して賞揚に値ひせぬ惡詩ではないのである。

\* \* \*

誤謬を看破するのは眞を發見するよりも遙に容易である。誤謬は表面にあつて正し易い、が、眞は深い底にあつて、萬人の能く探り得る所でないのである。

\* \* \*

人は過去によつて生れ、過去の爲めに滅される。

\* \* \*



吾等は大なる教訓に遭逢すると、直ちに匿れて、己が貧弱な心の底に潜む。されど、遂には必らず何等かの學ぶ所がある。

\* \* \*  
經驗的道義の世界は殆んど憎悪と嫉妬とのみより成る。

\* \* \*  
迷信は人生の詩である。詩人は迷信あれども毫も累とせぬ。

\* \* \*  
如何に平板なる生涯を送つて居る者でも、如何に平凡なる職業に安んじて居る者でも、心の底を叩けば、必らず人物相應の壮志があつて、夢寐の間にも、それを貫徹する法如何と模索しつゝあるのである。

る。

\* \* \*

不可思議なのは彼の密話である。一人に就いて其の言ふ所を聽けば、他の爲めに誤られたる廉もあり、欺かれたる迹もある。他の多數者に聽けば、其の人々も亦盡く同じ地位にあるもの、如くである。而して、眞實は遂に發見せられずして終るのが常である。

\* \* \*

非常の境遇に陥るのは、他人のことにしても、無論望ましいことではない。が、誤つて斯る境遇に陥る時は、品性を鍊り、意力を試みることが出来る。



\* \* \*  
品性だに高潔なれば、智見は褊狭でも、老獪を極めた詐欺師の謀計をもなほよく看破し能ふことが往々ある。

\* \* \*  
愛情の乏しい冷やかな者は阿ることを知らねばならぬ。然らざれば成功は期し難い。

\* \* \*  
非難を蒙つては、抗辯しても、辯疏しても、毫も効がない。頓着せずして思ふが儘に行動するがよい。非難は自ら消滅する。

\* \* \*

精カク  
精力あり才智ある人物がなくなれば衆人は一步も進めないのである。が、衆人は常に斯る人物を厭ふのである。

\* \* \*

子の短所を他に告ぐる者があらば、身分は子が奴僕でも、實は予が師である。

\* \* \*

他に義務を履行せしめて、而してこれが報償として権利を與へればよし、若し然かせざる時は、結局高價を拂はせられる。

\* \* \*

浪漫的の趣味を帯びた土地と云ふのは其地に遊ぶ者の胸に、懐古、



幽寂、荒涼、清閑等の名を以て呼ばるゝ一の恬靜なる崇高の感を起させる地方を云ふのである。

\* \* \*

莊嚴な「來れ、靈なる造主よ」の讚美歌は本來天才の祈禱なのである。此讚美歌が智見の明らかな人々の心を極めて強く動かすのはこれが爲めである。

註、「來れ靈なる造主よ」は聖靈祈請の讚美歌で按手禮の際等に用ひるのである。

\* \* \*

美は隱微な自然律の發露である。美が顯れねば斯の理法も永遠に

顯れずに終るのである

\* \* \*

誠實ならんことは予にも誓ひ得るが、公平ならんことは誓ひ得ぬ。

\* \* \*

忘恩は如何なる場合にも一種の缺點である。予は未だ眞に才能ある人々が恩を忘れた例を知らぬ。

\* \* \*

吾等は皆智見が褊狹で、而して各々自分の意見より正しきものはないと信じて居る。従つて、偶々眞に大智ある人物が出て、吾等は輕々に其の意見を誤謬と斷じ、其の人物を誤を喜ぶものと見てし



まふ。

誠心誠意善を行ひ正を履んで倦まざる者は眞に稀である。概ね見る所は、清高を衒ふ僞君子と、成功に急な山師の阿流とのみである。

\* \* \*

言語と繪畫とは、詞藻、譬喩等を見ても知らるゝ通り、相關的であつて、互に緊切な關係を保つて居る。従つて昔から歌ひ且つ語るほどの場合には、また、一方には、繪として之れを眼に示したものであつたのである。夫れのみではない、吾等は、少年の時代から、法律經濟の書に、聖書に、綴字書に、言語と繪畫とが相對して記され

て居るのを見て居る。書く可らざるとは言語に現し、語る可らざるとは畫に現して居つた時代には、何等の不都合をも見なかつたのである。然るに誤つて屢々繪畫を用ふべき時に言語を用ふるに及んで、遂に二重の弊が生じた。怪物、象徴的神秘論が即ちそれである。

\* \* \*

逸話集、金言集の類は、談話中、好き機會を見て、巧に逸話を語り、必要の起る時直ちに金言を思浮ぶる術をだに知つて居れば、世上の人の爲めには、大いに益がある。

\* \* \*

藝術家に對して行つて自然を研究せよと忠告する者がある。が、



平凡な現象から崇高な材を探り出したり、醜より美を拈出したりするのは、容易い業ではない。

興味を失へば、其事の記憶をも失ふ。

若い好事家は、煩はしくとも、其の煩はしきを忍んで、誘導せねばならぬ。斯る好事家が年老ゆれば極めて貞實な藝術の崇拜者となるのである。

怜悯なりと云はるゝ人は必らず百科辭典の最善なる者なのであ

る。

世には效を立てやうと思はぬが爲めに過を犯さぬ者がある。

自己對自我及び外界の關係を覺知した者は直ちにこれを稱して真理と云ふ。故に、何人にも其人の眞理があるのである。されど、眞理夫自身は常に同一で渝らないのである。

簡は常に普遍に従ふべく、普遍はまた常に簡に順應すべきものである。



\* \* \*  
眞の創造力は未だ曾て調節し得た者がない。其の奔るがまゝに放任すべきのみである。

\* \* \*  
造化の顯然たる秘密に覺醒し始めた者は直ちに其の最適當なる解説者たる藝術に對して熱烈なる憧憬の念を起す。

\* \* \*  
時はもとより一の元素である。

\* \* \*  
人は己れに人格化の性あるを悟らぬ。

\* \* \*  
理解力に看取せられぬ差異は斷じて差異でない。

\* \* \*  
吾等はすべての人のために生き得る者でない。居を共にするをだに欲せざるほどの人の爲めには殊に然りである。

\* \* \*  
知己を千載の後に待たうとするのは、自己の作に不死の或物がある、それが即今直ちに認められなくとも、現代の少數なる知己が後代には多數となるであらう、さすれば、遂には認識されやうといふ無我靈活な感が自己にある爲めである。



\* \* \*  
神祕と奇跡とは必ずしも同一でない。

\* \* \*  
「改宗者は予の憚ぶ所でない。」

\* \* \*  
青年時代に前後の思慮なく熱心に辯難の才を養つたのは予が若氣の過であつた。今日に至つても未だ全く此癖を免るゝことが出来ぬ。

\* \* \*  
人としては俊才も低能者も更に異なる所はない。人類なればといふ斟酌は如何なる人に對してもしなくてはならないのである。

\* \* \*  
予は人の自由思想を語るのを聞く毎に、そが虚しく口舌の響と共に消去るのを見て常に駭いて居るのである。が、思想はもとより自由ではあり得ないのである。それが能動的で、靈活で、そして不羈自由であり得るのは、只創造的なるべき其が神聖なる天職を全うせんが爲めばかりである。概念は、また、其の天職を全く異にして居るからして、更に自由ではあり得ない。自由を望み得るのは獨り情念のみで、而して、生々たる人心は斯の情念の形成する所である。情念と雖、周圍の事情及び要求に根ざして、人心に生起する者たる以上、自由なるは稀である。吾等は其の他に何も云ふまい。が、日々



耳にする所を此試験法に依て判断せよ、神會する所があるであらう。

\* \* \*  
才人が過つて愚行を演ずると、其の結果が少々でない。

\* \* \*  
美術品は、極めて優れたものでも、極めて劣等なものでも、凡て構想の如何が主である。

\* \* \*  
一箇の話色をだに用ひずして而して夫自身一箇の話色を成して居る詩がある。

\* \* \*  
尤物は如何にするも評價し能はぬ。

\* \* \*  
予は根本的觀念を得るに心を役して倦まなかつた。而して、遂に有爲の士が努力によつて到達し得る各方面に於ける極致を發見し得た。

\* \* \*  
嚴重に云はゞ、人が自ら知れりと云ふ時は實は毫も知らざる時なのである。知識の増すと共に疑惑も亦増す。



○ 吾等をして他の愛慕的たらしむるものは實は吾等が平素の短所である。

\* \* \*  
世上には己れに等しき者を喜んでこれに接近するものもあり、また、己れに等しからぬ者を愛してこれに親む者もある。

\* \* \*  
人に窘めらるゝ毎に人生を厭うて悲觀する者は遂に敗殘の徒とならざるを得ない。

\* \* \*  
悪意を抱いたり、憎惡の念を挾んだりして觀察しては、知覺が銳

敏であつても、識り得る所は到底皮相に止まらざるを得ぬ。知覺の銳敏と、溫情と、愛と、すべてが兼ね具つた上で觀察すれば、人天の神髓も徹見するに難からざるべく、また、進んでは、究竟原理も容易に透見し得られるのである。

\* \* \*  
英國の某批評家は予を評して、パノラマ的才能を有する者と云つた。予は深く某批評家を徳とする。

\* \* \*  
生の材料は何人の眼にも入る。が、其の意義はこれを描寫しうべき者のみよく發見し得るのである。其の形式に至つては、多數者の



眼には一箇の秘密である。

\* \* \*

吾等が活氣を保つものは我が本來の傾向である。青年は青年に接觸するによつて新に我の發展を促される。

\* \* \*

如何に見ても、人生には明暗の二面がある。

\* \* \*

誤謬は絶えず反覆せられて行爲の上に現れる。吾等も亦倦まず眞實を反覆して説かねばならぬ。

\* \* \*

羅馬には生きたる羅馬の市民の他に彫像の市民もあつた。が、それにも似て、今の世には、實在世界の他に、強い力で人心を牽く妄想の世界があるのである。世人は概ね斯の世界の人である。

\* \* \*

人類は紅海に譬へられる。杖で分けても分けても。また直ちに合流する。

註、舊約全書出埃及記の故事参照

\* \* \*

史家の本分は、眞と偽とを別ち、正確と不正確とを別ち、疑はしきと信すべきとを別つ處にある。



編年史は現在を重しとする者のみこれを記す。

吾人の思想は再現する。吾人の信念は益々固くなる。が、事實は去つてまた回らぬ。

「あらゆる國民の中にて最よく人生の夢を見たるものは希臘人なりぬ。」

翻譯家は、譬へば、美人の半面を掩うて、而して、其の艶色を喋々

し、口を極めて其の愛すべきを説く、世話焼の媒酌人の如きものである。而して、原作に對して禁め難き憧憬の念を起させる。

吾等は容易く古人に服するが、後代の人には服さぬ。子の才を妬まざるものはひとり父あるのみである。

服従は取立て、賞す可き徳ではない。が、自ら卑しうして、而して他を推奨するのは賞す可きことである。

生を得んが爲めに生を棄てるのが人として生る唯一の途である。



\* \* \*  
吾等は活動と業務とだけで既に疲倦し了らんとする傾がある。

\* \* \*  
「希望は薄命なる者の第二の靈魂なり。」

\* \* \*  
「戀は眞の革新者なり。」

\* \* \*  
經驗は限りなく増加するが、理論に至つては然うでない。今より以上に精到になる餘地もなければ、また、今より以上に完全になる餘地もない。經驗の分野としては、宇宙の全部が開放せられて居

る。が、理論は人智の界を出づることが不可能である。従つて、同じ宇宙觀照法を反覆する他に途がないのである。廣汎なる經驗を一方に積みながら、狹窄ある理論を再び採用せねばならぬやうな不可思議な現象を往々にして見るのはこれが爲めである。

\* \* \*  
觀察の對境となつて絶えず觀照せられ推度せられて居るが、此の世界は何時も變らぬ此世界である。又、或は眞の世界に住し、或は虚妄の世界に住するが、人類はどれも同じ人類である。人は、眞の世界に住する者よりは、虚妄の世界に住する者に却つて安心がある。



眞は人性に悖るが、過誤に至つては然うでない。其理由は極めて單純である。眞は人生の制限を承認させやうとするが、過誤は人意を迎へて、人生は決して制限された者でないと信せしめやうとする。

\* \* \*

一度爲し得たることは當然再び爲し得るに違ひなしと想像する者がある。尤もの考である。然るに、他には、前に爲し得ざりしと爲し得べしと信する者がある。誠に不可思議である。が、決して稀でない。

\* \* \*

知識の増進に辛勞するのは往古より箇人に限つて居る。ソクラテ

スを毒害したのは時代であつた。フースを燔殺したのも時代である。時代は停止して變化しやうとしない。

註、ソクラテスは希臘の哲人でプラトーンの師である。時代の爲めに忌まれて毒死の刑に處せられた。フースはボヘミアの教會改革家で英國の宗教改革家ウイクリッフの弟子である。千四百十五年道の爲めに燔殺された。

\* \* \*

箇體を假つて全體を暗示しやうとするに方つて、夢、又は、影の如く朦朧と示さずに、不可知世界の刹那的顯現でもあるかのやうに、靈活に示した場合を眞の象徴といふのである。



\* \* \*  
勢威ある者は往々専横の謗を受ける。

\* \* \*  
新教徒から、慈善事業と其結果としての巧績とを取去れば、只感傷的氣分が残るのみである。

\* \* \*  
他人の善言を容れ得る者はこれを與ふる者に比して毫も劣らぬ。

\* \* \*  
専制主義は責任を徹頭徹尾箇人に負はせて極限の活動をなさしめんとする主義である。従つて一般に自治の風を進むるの效果がある。

\* \* \*  
詩作界のスビノザ主義は哲學界のマキアベリ主義である。

\* \* \*  
過失を償はんとせば、高價を拂はざるを得ぬ。而も、なほ、償ひ得ば、自ら慶賀せねばならないのである。

\* \* \*  
藝術界にも好事家あり、山師あり、偽技術家あるを免れぬ。好事家は道樂の爲めに技術を修め、山師は利得の爲めに技術を學ぶ。

\* \* \*  
省慮的熱情とも名づくべき一種の情感がある。奔放を極めざる限



り、頗る價值がある。

\* \* \*

の學校教育そのものは實際人生の豫備に過ぎぬ。

\* \* \*

誤謬と眞實との關係は睡眠と覺醒との關係に等しい。誤を悟つてから新に精力を倍して眞實を追求した者があつたのを予は實際目撃して居る。

\* \* \*

自ら働かぬ者は苦まねばならぬ。他の爲めに働くのは自己の快樂を他に頼たんが爲めに他ならぬ。

\* \* \*

理解力の對境は知覺及び理解力の支配を受ける。禮儀も亦その例に洩れぬ。而して機智に近似して居る。が、禮儀は常に時と事情との支配を受けて變化する。

\* \* \*

書を読んで益を受けるのは、事實上、自ら批評し難き書を読んだ時のみである。讀者が批評し得る書籍の著者は却つて讀者に益を請はねばならぬのである。

\* \* \*

聖書が勢力を永久に維持して行けるのは、實は、起つて、予は此



書の全部を把捉した、而して、また其の各部を解し得たと揚言し得る程の者が此の世界の存在する限り出づべくもなきが致す所である。が、吾等は肅つしんで云はうと思ふ、希くは、其全體を尊敬し、其各部を實行するに努めんかなと。

\* \* \*

神秘主義は凡て超絶的である。而して其目的とする所は、其既に超絶し得たと思惟する問題を討究するにあるのである。超絶したと思惟する所の問題が大にして且つ緊要なれば神秘主義者が勞作の結果も亦従つて豊富である。

\* \* \*

東洋の神秘的詩歌が顯著な地位を占めて居るのはこれが爲めである。世界の富は鍊金學者が超絶すると否とに拘らず常に其が前にあつて變らぬ。彼の鍊金學者は自ら超絶したと思惟する富を左右に置いて、而して自ら脱離せんことを渴望して居る富に傲つて居るのである。

\* \* \*

基督教は教義中に既に神秘的分子を存するが故に信徒中に更に神秘主義者を收容するを要せぬ。加之、斯る輩には徒らに艱澁を好んで高遠な問題に隠れる弊がある。

\* \* \*



才人某が、曾て予に云つたことがある。新神秘主義は感情の辯證法である。往々神異絶妙の感を與へるのは、これは必竟常識、理性、若しくは宗教の如き常道を以て達し得ざる歸結をこれによつて發見するが爲めに他ならぬと。勇氣もあり、力もあつて、研究しても瞑眩する虞がないと自信する者は、險を冒して彼のトロフォオニオスの洞窟に入るも亦よからう。されど、入る者は、身を危険の地に處く覺悟がなくてはならぬ。

註、トロフォオニオスの洞窟といふのは、希臘の有名な神殿で、此處に神託を乞ふ者は、頭を狭き洞口に入れ、足を外にして、伏して待てば、やがて何とも知れぬ力にて内に引入られ、斯くて

少時内にありたる後、前の如くにして推出され、而して、推出されたる時は、顔色蒼白に變じて、物凄く、見る者をして悽然たらしむと云ふ。これよりして「トロフォオニオスの洞窟に入る」の句は傷神、憂愁の人を形容する諺となつた。

\* \* \*

偏見は根差を人格に有つて居る。従つて、境遇と密接の關係を結んで現はれる時は、牢として抜くことがならぬ。明證も、常識も、理論も、毫もこれを動かす力がない。

\* \* \*

人は往々自己の弱味を以て權度としやうとする。世故に長けた者



が言つたことがある。曰く、恐怖の念を背後に隠した戒慎には克てぬ。弱者は往々革命思想を抱いて、治むる者が上になくば更に幸福であらうと想像する、が、自己の自ら治むる力なく、また、他を治むるの力なきを悟らぬと。

\* \* \*

常識は、健全なる者にあつては正しく生起して、自然に發達し、其の主のために必要であり、又、有用であるものを明らかに甄別し、認識するに至るのである。思慮ある男女はこれに信賴する。男女共にこれを缺く時は、自分の慾求する所のものを必要と見、己れの意に適するものを有用と做すの過に陥る。

自由になれば、苦んで己れを矯める者は一人もない。强者は極端に力を揮ふべく、弱者は益々優情に流るべく。

\* \* \*

古きもの、現存せるもの、繼續せるもの對發達、改良、刷新の争は如何なる世にもある。制度はすべてが形式の株守に終る。すると世人は、これが破壊を企てて、却つて制度そのものまで破壊する。而して、少時の後には、また 新に制度の創造を企てる。古典主義對ロマン主義、獨占會社對商業の自由、大地主制度對土地國有制度等の争を見るに、是等の争は、すべてが終を同じうした同じ争であ



つた。而して、新制度の建設に終つた。されば、爲政の任にあるものとしては、争を緩和して、雙方の間に平衡を保たしめ、孰れをも敗北せしめざるを最上の策とする。が、今日までの成績を見るに此の策は人力のよく實行し得る所でないし、また、神意も其處にはないやうである。

\* \* \*

大作に接する時は、自分の鑑賞力が如何にも斯る作を味ふには不足なやうな感がして、吾等は一時自信を失ふのが普通である。で、吾等は自分が鑑賞して、其の精神を自分のものとし、智情の基礎、成分とし得たゞけの程度にしか作物の價値を認めない。

\* \* \*

人には一般に剪劣な者よろこを擇ぶ傾向がある。が、これは其の者が剪劣なれば、それに對する自分の心が安いからで、敢て怪むに足らぬ。同臭相會した時と同じ寛いだ感がするのである。

\* \* \*

野卑、凡庸の徒は如何に指彈しても、到底移らぬ。努力するだけ損である。

\* \* \*

性行に予盾のあるのは人として免れ難き所である。これあらば、唯努めて正すべきのみである。が、それがもと他人の意に基いた矛盾



盾であつたならば、心を苦しめる必要はない。自分の關るべきことではないのである。

\* \* \*

予は問はれたことがある。如何なるがこれ最善の政體かと。予の答は斯うであつた。自治を教へるものであると。

\* \* \*

女子に對すると、男子は、恰も紡竿を廻して糸を紡ぎ出すが如くに扱はれる。

\* \* \*

吾等は公私の不幸に遭遇した時に特に甚しい打撃を蒙ることがあ

る。これは恰も、麥が連枷で打たれるやうなものである。而して、運命が、注意が足らずに、登熟みのりのいゝ束に遭ふと、藁を潰したのみで止める。すると、中の穀粒が少しも打撃を感じないで、粃打場の床を彼方此方と面白く跳んで、水車場へ送らるゝと、畑へ遣らるゝと、己れの運命が如何に定まるべきかを意に留めぬといつたやうなことがあるものである。

\* \* \*

豫想は、最も確實であると定まつた場合でも、なほ若干の疑を容るゝ餘地があるものである。自己の豫想が事實となつて現はれると何人も必らず先づ駭くのはこれが爲めである。



\* \* \*  
他國の藝術はいづれも短所があつて、多少斟酌を加へて見なければならぬが、希臘のそれのみは永久に吾等の師表である。

\* \* \*  
英人の多感な者は滑稽趣味があつて、溫雅である。佛人の多感な者は俗で、涙脆く、獨人の多感な者は稚氣があつて、現實的である。

\* \* \*  
頓狂なことは、高尚に云へば、厭惡を招くが、同時に、賞讃をも受ける。

\* \* \*

社交的會合として最も良いのは、世人の云ふには、其の座に連つて談話を聞けば教訓が得られ、一座沈黙の間にも座にあれば修養の便が得られる者である。

\* \* \*

無智なるより出た行爲ほど恐るべきものはない。

\* \* \*

其の奴隸となるまいと思はゞ、美と天才とは、美と天才とは、肅つしんで、遠けねばならぬ。

\* \* \*

神秘論は感情の煩瑣哲學である。感情の辯證法である。



\* \* \*  
吾等は、老人に對して、幼兒に對してすると同じ斟酌をする。

\* \* \*  
吾等は齡を重ねると共に、人類の最大特権の一を失ふのである。  
吾等は、老年になると、同輩と比較して批判されなくなる。

\* \* \*  
知識追求の途上、予は斯ういつた經驗をした。暗い中に起きて、  
焦慮しつゝ、曉を待った、而して待ち得たらば、更に旭日の昇るのが  
待たれた。而も、待つて見ると、直ちに目が眩んだとでも云つたや  
うな。

\* \* \*  
聖書頒布の利害を論議する者が往々ある。今後もあるであらう。  
が、予を以てすれば、理は極めて明白である。聖經を宗派的の目的  
及び空想的の目的に用ひれば、從來の如く、有害であらう。が、其  
の教訓を無我の態度を以て受入れるようにしさへすれば、從來の如  
く有益であらう。

\* \* \*  
偉大な獨創的才力は、初から現れて存したものでも、時と共に發  
展し來つたものでも、作用して瞬時も息まない。而して、これが結  
果の善惡は一に機會の定むる所による。



\* \* \*  
觀念は一にして久遠である。此の語を複數に用ひるのは正しくない。吾人の認識し、且つ、口にすることを得るのは、皆觀念の箇々の發現に他ならぬ。吾人は概念を表現する。而して、此の點に於ては、觀念それ自身もまた概念である。

\* \* \*  
美學上から云へば美の觀念といふことを云々するのは正確でない。斯く云々するからには、如何にしても抽象的に考へ能はぬ美を抽象しなければならなくなる。吾人の形造ることを得るのは美の概念で、他に傳へ得るのも亦概念にすぎない。

\* \* \*  
學問ある人を見るに、概ね第一原理の一面をのみ識つて他を知らぬ。また、適々知つて居る者があつても、其れは極めて稀である。が、これで事は全く足りて居るのである。才能は應用の上に熟する。理論の末に拘はる必要はない。樂師、彫刻家を無視し、彫刻家、樂師を無視するも、亦、可。

\* \* \*  
吾等は何事をするにも實際的でなくてはならぬ。根本觀念の種々の表現を扱ふにしても、さうである、吾人の頭腦の許す限り、互に調和を圖つて行かねばならぬ。詩と、造形美術と、演劇と、此の三者



はもとより緊切の關係があるが、其の一を選んで自分の職業としたならば、吾等は務めて専門以外の藝術の悪影響を蒙らぬやうにする必要がある。彫刻家は畫家に迷はされて邪路に陥る。畫家はまた俳優に迷はされて邪路に陥る。斯う云つたやうにして、三者が互に混淆したら、藝術は一も堅固な基礎の上に立つたものがないと云ふことになつてしまふ。

\* \* \*

模倣藝術なる舞踊は結局すべての造形美術を破壊するであらうし、また、さうあるが、理の當然である。が、幸なことに、舞踊が官能に與へる感は刹那的であるから、人を酔はせるには、誇張を用

ひねばならぬことになる。従つて、他の藝術家も、驚いて、去つてしまふ。そこで、此人々が、此際、唯去つてしまはずして、綿密な研究をしたならば、これによつて大なる教訓が得られるのである。

\* \* \*

ロラン夫人が、斷頭臺に立つた時、最後の旅路に即く刹那の感想を記すべくした、紙筆の請求が、許可にならなかつたのは、蓋し千秋の恨事である。不動の精神を有する者は、死に臨むと、從來思ひ得なかつた思想が湧起するもので、而して、その思想がまた、恰も聖福を受けた運命の精靈が榮光赫々として過去の頂上に下つたかの如きものであるに、嗚呼！



註、ロラン夫人は第一佛國革命の際ジロンド黨の首領であつた  
チャンマリローランの夫人で一千七百九十三年の政變に同黨の領  
袖等と共に斷頭臺上の露と消えたのである。終焉の時國家の名に  
於て犯されたる罪の何ぞ夥しきやと叫んだので有名である。

\* \* \*

職業は種々に變ずべきものでないと獨り心に思ふとが一生の間には、何人にしても屢ある。殊に、新らしい職業に移らうといったやうな志は、年齢の加はると共に、漸々失せる傾向がある。所で、斯る意見を以て、他を諫め、己れ自からも警戒するのは、よいが、年齢を重ねるといふことが、元來、新しい職業に就くと同じ結果にな

るのは如何とも致し難からう。四圍の状況が盡く變つてしまふ。而して老人は、全く活動を止めるか、自ら進んで新らしい業務に就くか、其の一を選まねばならなくなるのである。

\* \* \*

奈翁は、徹頭徹尾思想に活きた人物でありながら、自分では、それを事實として認めることが出来なかつた。而して、一方は理想の實現に刻苦しつゝ、一方には全く理想を排して、これが實在をさへ否認した。が、奈翁の知見はもとより透明である。剛健である。斯る継続的な矛盾に勝へ得る筈がない。彼は遂に溢々此の問題に對する自分の見解を述べた。而して甚だ興味があるのは彼の其の際の



態度が異様で、而して頗る愛嬌があつたことである。

\* \* \*

奈翁の意では、思想は精神上の一現象で、決して、實在性はない。が、消滅した時、後に残滓を残す。此の残滓には若干の實在性がある。これは全然否認し去ることはならぬと。此の言を見れば、奈翁は全く偏狭な物質的見解を抱いて居つたやうである。が、信念も確で、自信も確で而して交友を會して、自己の生涯の活動の及ぼす久遠の影響を語つて居つた時には、其の曰ふ所が全くこれと異つて居た。彼は、人が人を造るといふことも認めた。また。充實した行爲が永劫に効果を失はぬといふことも認めた。また自分が世界の大勢

に新なる衝動と新なる方向を與へたといふことも喜んで承認して居つた。

\* \* \*

文學は斷片中の斷片である。文學によつて記録された事件は、生起した事件、傳稱せられた事件の中での極めて小部分に過ぎなかつた。而して、記録された部分の中でも、保存せられたのは其の中の極めて少量であつた。

\* \* \*

文學は、斯る不完全な状態にあるのであるが、夫れにも拘らず、摸倣反覆の多いことは驚くべきものである。是れに由て觀るも、人



類の智能、運命が甚しく制限せられたものであるといふことが判る。

\* \* \*

瑣々たる一時の我執は世界の史乘を假り來つて突合せれば直ちに棄てさせることが出来る。

\* \* \*

歴史家と詩人と、二者、孰れをとつて上位に置くべきか——此疑問は決して發すべきものでない。兩者の互に位置を争ふべきものでないことは、競走家と拳闘家とが相競ふ可きものでないと同様である。各月桂冠があるのである。各別に目的とする所があるのである。

\* \* \*

史家には二重の義務が有る。自己に對する義務と、世人に對する義務と。即ち自家の爲めには、蓋然的事實を精査せねばならず、世人の爲めには、事實の實否を決定せねばならないのである。自家に對する義務を遂行する方法の如何は、専門史家間のみの問題で、何れでも宜しい。が、世人に對しては、正確動す可らざるものとして誌し得べき史實が稀少であるといふ秘密を、徒らに洩してはならぬ。

その旨

\* \* \*

書籍は新しい知己と同じやうなものである。初め自分の見る所が大體に於て内容と一致するか、または、所説が自分の生活の大體と其傾向を等しくするかしきへすれば、吾等は頗る大なる愉快を其書



籍によつて得る。不一致點が目立つて來るのは、それから再讀三讀して、更に深く識つてからのことである。斯うして一致せぬ點が現れて來たならば、子供同士の交際の如く、直ちに離れずに、合する所に於ては合し、合せざる所に於ては、強て合せず、務めて何故に合致しないかを明らかにするがよい。合理的であつてそしてまた最效果ある讀書の方法である。

多く兒童に接して居る者は外部の影響が必然的に反動を起すのに氣がつくであらう。

\* \* \*  
\* \* \*

此反動は無邪氣な兒童に於ては殊に作用が活潑で、そして甚だ熱烈である。

兒童が、平素、偏したとまでは行かねどいづれかと云へば輕率な判断を下すことが多いのは是れが爲めである。而して、一旦の偏した考を消して、一層公正な觀念を抱かせるには若干の時日が要る。此點に相當の注意を拂ふのは、教師の主要なる仕事の一である。

\* \* \*

心理的省察が甚しく困難なのは、内界と外界とを並行したもの、否、寧ろ交錯したもの、と見ねばならぬとした爲めである。内外の



兩界は活靈の不斷の鼓動である、呼吸である。これを言語に表現することはよし不可能であるとしても、吾等は是非綿密な省察を加へねばならぬ。

\* \* \*

シルレルと予との交友はもと兩人の努力が其の趨く所を一にした結果、結ばれたのであつた。而して、また、兩人が協力して働けたのは、目的を達する爲めに兩人の採つた方法が各々異つて居つたからであつた。

\* \* \*

前年或些細なことからシルレルと議論を闘はしたことがあつた。

今シルレルが書簡の一を讀まうとして、端無く其の争點を想起させられた。當時の予の所論はかうであつたのである。普通の代表として特殊を索める詩人と、特殊の中に普遍を見る詩人とは、其作に大なる差異がある。第一の方法による作家は特殊を以て普遍の一例、一端とのみ見る寓言を作出す。が、第二の方法は、これは、詩の本質的方法である。此の方法を採る作家は直ちに特殊を表現して、毫も普遍を思ふことなく、また、何等の普遍に觸るゝ所もないのである。特殊を靈活に把持する者は同時にまた普遍を把持する者である。自分ではこれを感知せぬ。また、感知しても、それは久しきを経た後でなければならぬ。



\* \* \*  
注意して都會の住民が夕を娛樂に費す方法を見るに、彼等は必ず自分の知己朋友と會して談話を交換し得る所か、または、社交的談話若しくは娛樂の間に同志の人々を見出し得られるやうな所を選んで行くやうである。

\* \* \*  
交友を永く維持するには絶えず温める必要がある。性向が同じいからとて、何等の助とはならぬし、愛情とて頼みになるものではない。友誼を真正に、積極的に、有効にしようとならば、雙方から努めて接近する機會を多くして、互に他の志望を成し、そして、共に

向上の途を辿るべきのみで、生活の法や思想の傾向などの異ると異らざるとは意に介するに及ばぬ。

\* \* \*  
世間が人を評價する場合には實力を目安とする。が、人が自分を評價する場合にはさうばかりもならぬのが實情である。不快な人物よりは、凡庸の人物の方が一般に恕し難い。

\* \* \*  
後患だに貽らねば、如何なる事でも社會に強ひられぬことはない。  
\* \* \*  
先方の接近して來るのを待つて居ては人は識られぬ。人を識るに



は、自分の方から進んで接近しなくてはならぬ。

\* \* \*

世人は客が未だ門を出でぬに早くも客の缺點を抉出して過酷な批判を下すことが往々ある。吾等は各々自己によつて他を律する権利を有つて居るやうなものである。予を以てすれば、これが當然なのであらう。聰明、重厚な人でも、斯る場に望めば、苛嚴な非難を試みるの過は免れない。

\* \* \*

然るに、他を訪問して、其の人の周囲の状況を見、平生の習慣を知り、且つ其人としては其の境遇が必至のものであるのを理解し、そ

して、其の人が周囲に影響を及ぼす状と、其の人が身を持つるの法とを現實に看取したならば、必らずや多大の尊敬に値する或ものを其處に發見し得られるであらう。其の上でなほ嘲笑を逞しうする人は、斷じて愚痴、邪癖の人である。

\* \* \*

他の手段、即ち暴力を用ひねば容易に達し難い目的でも、暴力を用ひてすら到底達し難い目的でも、吾人は一切所謂禮儀、辭令によつて達せねばならぬ。

\* \* \*

婦人の混つた會合は禮儀の團居である。



\* \* \*  
各自の特性、即ち、箇性と禮儀とは如何したならば兩立し得るであらうか。

\* \* \*  
各自の箇性は禮讓の爲めに却つて顯れるものである。不快さへ感ぜぬば何人も箇性の發揮は希ふ所であらう。

\* \* \*  
世の中の事、萬事に互つて、利益と云ふ利益は大方學問ある軍人に占められて居る。社交上の利益に至つても亦その通りである。

軍人は粗野である。が、決して其の本性を曲げない。概して野獸性の蔭に多少の温情を藏して居る。従つて、いざといふ時は、頼みになるからである。

\* \* \*  
普通人の武骨なのは頗る不快なものである。元來軍人の如く粗い業務を執る理<sup>わけ</sup>でないから、多少の禮儀は心得て居るに違ひないといふ豫斷があるから尙更である。

\* \* \*  
行届いた人と同席すると、他人が行届かぬ事をする毎に、氣遣ひをさせられる。



\* \* \*  
婦人に、語を交はすことはもとより顔を合すことさへ嫌がられる  
と知つたら、鼻に眼鏡を戴せて集會に出る者はあるまい。

\* \* \*  
恭しくすべき場合に狎々しくするのは、滑稽なものである。其の  
滑稽さ加減を知つたら、挨拶した後直ちに脱帽する者はあるまい。

\* \* \*  
禮式には深い道德的根底を有つて居らぬものは一もない。されば  
彼の形式と此の根底とを併せて同時に教へねば正しき教育法とはい  
へぬ。

\* \* \*  
舉動は己れの影を寫す鏡である。

\* \* \*  
心の中に愛情に近いほどの恭敬の念があつて、それが外に現れる  
ので、禮儀が美しい感を與へるのである。

\* \* \*  
任意の服従ほど美しい行爲はない。而も、心に愛がなくば何うし  
ても爲し得ぬ行爲である。

\* \* \*  
欲するものを獲たと想ふ時は最も欲するものに遠ざかつた時であ



る。

\* \* \*  
事實に於て自由でないに拘らず自ら自由であると思ふ者がある。  
奴隸中の奴隸とは斯る人を云ふのである。

\* \* \*  
我れは自由であると絶叫して見よ。然らば直ちに自分の自由でないといふことが知られるであらう。我れは自由でないと諦めて見よ。さらば自分の自由なのが直ちに知られるであらう。

\* \* \*  
勝つた者には愛を以て對するより他に採るべき術がない。

\* \* \*  
愚衆に擔がれるほど名士にとつて怖るべきことはない。

\* \* \*  
給仕人の目には何人も英雄でないと謂ふ。されど、それは、英雄を知る人は英雄でなければならぬが爲めで、恐らく給仕人はよく給仕人を識り得るのであらう。

\* \* \*  
凡庸の徒にとつては天才とて久遠に生きるものでないといふ事實ほど慰藉を齎す思想はないのである。

\* \* \*



俊傑は何等かの弱點によつて時代を反映する。

\* \* \*

吾等は徒らに人を怖れる傾きがある。が、愚人と思慮ある者とは共に恐しくはない。極めて恐しいのは生中の愚人と、生中の才人である。

吾等

\* \* \*

世間を遁れるには藝術に隠れるよりよい方便はない。また、世間に觸れるには藝術に隠れるよりよい方便はない。

吾等

\* \* \*

至上の幸福を味ふ刹那にも、甚深の不幸を嘗める瞬間にも、共に

吾等は藝術家の必要を感じる。

吾等

\* \* \*

藝術は困難な、そして甘美な仕事である。

\* \* \*

むづかしい材題が軽く取扱はれたのを見ると出来ぬ事だといふ感が湧いて来る。

\* \* \*

困難は終局に近づくに従つて増す。

\* \* \*

詩くのは刈るよりも勞苦が少い。



未來の雲霧のうちに匿れて居る未知の事件が自分に都合よく運べばよいといふ潜在意欲は何人も有つて居る。未來を豫測するのを好むのはこれが爲めである。

吾等は大集會に臨む毎に、思はぬことは殆んどない、斯る多人數が會合することであるから、我が朋友知己も來るに違ひないと。

如何なる隱遁の生活を送つて居つても、世間に對して知らぬ間に借主となり、貸主となつて居ることが往々ある。

吾等は自分が恩を施したことがある者に邂逅へば直ちにそれを想起する。が、自分が恩顧を蒙つた者に會ふと、それを憶出したにせぬことが實に多々である。

自己の意志を他に傳へやうとするのは天性である。他より傳へられたことを受入れて、それを消化するのは修養の結果である。

自分が他人の言を誤解することが頻々としてあるのを知つたならば、廣人稠座の中で敢て多言する者はあるまい。



\* \* \*  
吾等が他人の言を傳へる際往々違へるのは眞に領會し得ない爲め  
であらう。

\* \* \*  
他人の前で談話する時、聽者に阿ることなしに話を進めると、遂  
に不快を買ふ。

\* \* \*  
人の口を洩れる言語はいづれも反對の意義を暗示する。

\* \* \*  
會談の材料としては、議論も、阿諛も、佳なるものではない。

\* \* \*  
親しみあるうちに互に禮儀を守ることが忘れぬ會合が最楽しい集  
りといふものである。

\* \* \*  
平素其人が滑稽視して失笑するものほどよく人の品性を表はすも  
のではない。

\* \* \*  
無意識的に官能の前に呈示された對照コントラストが即ち滑稽である。

\* \* \*  
俗物は失笑すべきことなきに失笑することが往々ある。そして、



其の笑たるや必ず慢心の發露である。

才人と知る

才人は殆んどすべてのものを滑稽視する。が、智者は然うでない。

\* \* \*

人は自分の短所の爲めには多大の煩をも甘んじて受けるし、また、これが爲めには禍を受くるをも辭さない。また、これが結果をばよく隠忍する。そして、改むるの己むなきに立至れば頗る苦惱する。

\* \* \*

多少の短所は箇人としての存在上必要である。吾等は舊友が習癖を改めるのを見ると快く感じない。

彼れが平素と異つた行爲をしたら最早久しく生きまいと人を評して云つた者がある。

\* \* \*

さらば、吾等は如何なる短所を保存し、且つ圓熟させたらよいか。惟ふに當り障りがなくして、而して他に快感を興へるものであらねばなるまい。

\* \* \*

情慾は吾等の徳と不徳とが強烈に現れたものに過ぎぬ。

\* \* \*



吾等の情慾は實際傳説に現れた不死鳥に似て居る。古いものが死ぬと、新なるものが直ちに其の灰の中から生れてくる。

深刻な情慾は云はゞ不治の難症である。對症の療法さへ既にこれを危険に導くのをなすにすぎないのである。

感情は周囲の人々の言動によつて激烈にもなるし、また、和らぎもする。愛する者に對する言動ほど中庸を要するは恐らくあるまい。

死者を是非するのを正當と思ふ者はあるまい。人は誰れも一生を

不幸の中に過して居るのである。神にあらずして誰れか人を裁き得やう。残つた者は逝ける者の過失や不幸を數へるのを止めて、宜しく彼等の功業と、功程とを追思すべきである。短所は人性に根差し、長所は箇々の努力に生れる。不幸や缺點は吾等の一併に有するもので、徳は各箇別々に生み出したものである。

人生の行路に横はる險難は明らかにそれと在所を示し難い。また示し得べきものでもない。それで、世路を辿る者は盡く此の障礙に躓くのである。然るに、詩人のみは明に其の在所を示す。



神の目に人智のすべてが單に虚しき愚痴と映するやうであつたらば、七十年の一生も實に生きるに値ひしなと思ふ。

眞理は神に等しい。本體は人の眼に入らぬ。吾等は其の表現を見てこれを推すのみである。

醇乎たる學者は可知から不可知を推度して、而して、主に接近する。

されど、吾等にとつては、可知から不可知を推度するのは容易な

\* \* \*

業でない。人は知らないが、智力の信じ難いことは自然と一般的なものである。

\* \* \*

神は人に教ふるに其の業迹を模す可きを以てした。が、人は自家の爲す所をのみ知つて摸倣した神迹は認めない。

\* \* \*

物凡てが等しくして等しくない。有益で有害、有聲で無聲、合理で不合理である。眼前の事物に就て吾等の言ふ所でさへ往々矛盾して居ることがある。

\* \* \*



法律は人自ら定めて人に命じたもので、定める時には、誰の爲に  
にするのか、何の爲めにするのか知らなかつたのである。が、自然  
律は神が定めたのである。

\* \* \*

人爲になつたものは、正しきも正しからぬも、皆正鵠を失して居  
る。神の定めたものは、正しきも正しからぬも皆必らず當を得て居  
る。

\* \* \*

鍛鐵場を見るに、先づ、棒鐵を火に入れて、吹いて、滓渣をと除り、  
鐵を柔軟にして、而して、滓渣の除れたのを見ると、打つて、鍛へ、

然る後、清水に入れて、再び堅くする。人も亦教師の手で同様の鍛  
錬を受けるのである。

\* \* \*

自然の摸倣だからといって藝術を侮るものがあらば、吾等はそれ  
に答へて云はう。自然も亦他の多くの物を摸倣して居るではないか  
と。また、藝術は常に肉眼で視得る所のものを摸倣して居ばかりでな  
く、自然の基本たり、規範たる理を摸出うっしたして居るではないかと。

\* \* \*

また、藝術には尠からぬ創造力がある。そして自然に缺陷のある  
場合には、藝術固有の美を以て大いにこれを補ふことが出来るので



ある。フィヂィアスがゼウス神を刻むだ時には、眼に見える模型はなかつたのだ。眼前にゼウス神が見えるとしたらかうと想像して刻んだのである。而も、なほ、よく神が刻めたのであつた。

\* \* \*

自己の身に具はつたものは棄てやうとしても棄てられぬ。

\* \* \*

佛蘭西哲學の最新傾向を見ると、人と云ふものは、如何なる方向に外れても、何時か本來の傾向に復歸するものだといふことがわかる。一國の民にしてもさうだ。が、これが人の生活方法及び傾向を決定するものだとするれば、當然さうなくてはならぬ道理である。

\* \* \*

佛蘭西人は物質論を抛棄してしまつた。そして、萬有生起の原動力に更に少許生命と精神力とを加味して來た。唯覺論とも袂を分つしまつた。そして、人性の深所に自己發展の能力が在ることも認め、また、其處に、創造力の存することも肯定し出した。最早佛蘭西の哲學者には藝術を單に物質的外境の模倣と見て説明し去らうとする者はない。切に望む、此傾向の永續せんことを。

\* \* \*

哲學には折衷の二字を冠したもの、ありやう筈がない。が、哲學者にはあらう。



\* \* \*  
周囲の事物の中から己れの性に合つたものを擡き出してそれを己れの用に充てる者は、凡て折衷家と云つて可い。理論の方面にせよ、實行の方面にせよ、文化といひ、進歩といふ現象が現れ來つたのは一にこれが結果にすぎないのである。

\* \* \*  
故に、正反對の境遇に生れた二人の折衷哲學者があつて、過去現在のあらゆる哲學者の所説から各々自己の可とした部分だけを假り來つて自己の體系を立てたとしたらば、水火の如く相容れぬ論敵が出來やう。なほ、眼を遠く放つて見たら、世人は皆此二哲學者の如

き、行動を生れた其の時から探つて來て、そして終に、他が自分と同じ所見をもたないのを不思議に感じるやうになつたのだといふことが、判るであらう。

\* \* \*  
自己をも世間をも歴史的に見て一切の争心を絶ち心を虚しうして他に對するやうな境地には老いても容易に到り得ない。

\* \* \*  
仔細に研究すると、専門の歴史家でも、歴史を歴史として冷靜に看得る者でないといふことが知られるであらう。歴史家は、如何なる時代を取扱ふにしても、其の時代の史實と形勢とを記述したばかり



で満足し得る者でない、必らず、自分が其の時代の人で、もあるかの如く書かねば己まない。眇たる年代記の筆者でさへ、多少其の居住した町、寺院、若しくは、時代に屬する制限及び習風を示して居る。

\* \* \*

吾等が今用ゐつゝある古諺は吾等が一般に解しつゝある意義とは元來全く異つた意義に用ゐられて居たものなのである。

\* \* \*

幾何學に精しからぬ者、若しくは、全く其の知識のない者は哲學者の塾に入れぬと言ふ格言は、今人の解するが如く學者たらん者は

數學者たらざる可らずといふ意義ではなかつたのである。

\* \* \*

古諺に謂ふ幾何學は、一般の初學者がユークリッドで初めに學ばせられるやうな根本原理なので、哲學の豫備科程、入門として極めて恰當な知識なのである。

\* \* \*

無形の點があつて後始めて有形の點がある、鉛筆を以て紙上に線を劃する前に、吾等はまづ任意の二點の間の最短き線は直線であると考へる必要があるといふ此の二の原理を解した少年は一種の誇と快感とを経験する。尤もな誇、尤もな快感である。あらゆる思想の



源は彼れにとつて最早秘密でなくなつた。觀念と實在と、勢力と現實と、今や、兩ながら、彼に明示せられたのである。哲學者も既に彼が爲めに何等の教ふべきものを有たないのである。幾何學を學んだ彼れ、少年は自らすべての思想の礎石を据えたのである。

\* \* \*

また、己れを知れと云ふ彼の有名な諺にしてもさうである。決して現代人のするやうに禁欲的意義に解すべきものではないのである。此の古諺に謂ふ所の自知は現代の憂鬱病患者、偏狂人、若しくは神經家等の所謂自覺と同様の意義は毫も含んで居らないのである。單に、自己に對して相當の省察を加へよ、自己の境遇に注意し

て、而して、儕輩及び世間に對する自己の關係を知得せよといふに過ぎない。此の語が果して斯く解せらるべきものであるとしたら、これが内容を實行するには何等の心的苦悶をも要さない。低能者にあらざる限り、何人でも、其の意味する所を知り、且つ感じ得られる。此の語は處世上何人にも極めて益のある好規箴である。

\* \* \*

吾等は、古人、殊に、蘇克刺底一派が、生活と活動の根本及び規範を吾等に示して、徒らに力を迂濶な思辯に費すの愚を戒め、且つ活きよ、活動せよと勧めた偉效を偲ばねばならぬ。

\* \* \*



現代の學校教育は吾等をして常に古代を回顧せしめる。そして、間接に古典語の研究を進歩させて行く。高等教育に必要缺く可らざる古典語の研究が斯うして廢絶せざるを得るのは吾等の大いに慶賀すべき所ではなくてはならぬ。

\* \* \*

自己の修養に目的を置いて、而して古代の文物に接し、且つ、眞面目な研究をする其の時、始めて吾等は眞の人間になり得たかのやうな感がする。

\* \* \*

拉丁語を書き且つ話さうとする時、學徒等は、自分等が大いに平

生と異つた、莊重な、そして、崇高な人物でもあるかのやうな感がする。

\* \* \*

詩や造形藝術やに興味をもつて居る者は誰も古代の文物に接すれば其の瞬間に自分が轉生して洵美な黄金時代の人になりでもしたかのやうな感がする。ホメロスの詩の如きは、今でもなほ、刹那ではあるが、數千歳の傳説が負はせた重荷を吾等をして忘れさせる力をもつて居る。

\* \* \*

眞に宗教と稱す可きものは唯二種あるのみである。人間に内存す



る神性を無形式なものとして認め且つ崇拜するのが一、また、極美の形式を附與してこれを崇拜するのが一。此の兩者の中間にある諸種の宗教は盡く偶像禮拜である。

\* \* \*

古人が宗教改革を通して精神上の自由を得やうとしたといふことは否む可らざる事實である。また、希臘、羅馬の古文明を復興した時代の趨勢が、より多く自由な、品位のある、そして、趣味の充實した生活を當時の人心をして欲求せしめ、憧憬せしめるに至つたのであるといふことも慥かな事實である。そして當時の人心が頻りに簡易の自然状態に復歸しやうとして努力して居たのが、一方に想像

力を熱烈に集注しようといふ努力があつたのと合して此機運を少からず促進したといふことも慥かな事實である。

\* \* \*

そして、聖徒は突如として盡く天を逐はれてしまつた。官能も、思想も、情操も、幼い赤兒を抱いた聖母を忘れて、盡く、善行をして、冤枉に苦む大人に趨つた。そして、此の大人を、暫時の後には、半神として拜した。が、また、少時の後には、神と認めて、拜するに至つた。

\* \* \*

斯の人は背景の前に立つた。そして其處から、靈的感化力を放出



した。背景は造物主が宇宙を展開しつゝあつたあの舞台であつた。斯の人の受苦はやがて規範となつた。彼の變生は永生の契約と見られた。

\* \* \*

香は火を熾んにし、祈禱は心裏の希望を新にする。

おんやま

\* \* \*

予は固く信じて居る、聖書は、深く解すれば、即ち、廣く解して、狭く一身に應用すると、一言一句の末までも、其場合に應じて、直截な、そして極めて適切な意義を帯びて來るといふ事實が充分に理會され、ば従つて美しい光輝を放つて來ると。

\* \* \*

嚴重に云はゞ、宗教計りではない。他の方面に於ても、吾等は、日に日に自ら新にして、而して、プロテスタント的態度を以て他に對さなければならぬのである。

\* \* \*

吾等は全力を擧げて遂行せねばならぬ、そして、寸時の猶豫もならぬ、日々果して行かねばならぬ、極めて嚴肅な、一の課業を有つて居る。そして、それは、自分の所感、觀察、經驗、想像、推理等と、能ふ限り一致した言語を用ひねばならぬといふ一事に止つて居るのである。



\* \* \*  
が、自ら試みたら判らう、實に想像に絶した困難な事業である。  
不幸なことに言語は大抵の場合單に方便として用ひられて居るのみ  
で、人の理解し思考する所を遺憾なく表現するが如きは到底其の處  
でないのである。

\* \* \*  
誠心誠意自他の胸中に萌起する虚偽、不當、未熟の觀念を排せよ、  
決して挫折すな。

年が寄るに従つて、苦悶せねばならぬ事の多くなるのが人生であ

る。

道義を廢てたならば我等は哀れ力のな

強者は他の服従が欲はしい爲め計りでなく、自己の企劃や行動を  
軽忽な反對の爲めに妨げられることを不便とする點から、必要な檢  
閲制度を維持しやうとし、弱者は自己 不服を表明したいといふ理  
由から自己の見る所を告白する必要上出版の自由を要求するといふ  
次第で圖書檢閲の制度と自由出版の要求とは永久に調和出來まい。



しかし、壓伏を蒙る弱者も亦、強者と同じく、出版の自由を阻害するものなることに注意しなければならぬ。黨を樹てる以上、背叛者の出るのを防がうとすれば、勢ひまた斯くの如き行動に出でなければなるまい。

\* \* \*

人は他に欺かるゝものではない。自ら欺くのである。

\* \* \*

一人の兒童を稱するには子といふ語がある、多數の兒童を概括して稱するには子供といふ語がある。國民に關しても矢張斯うなくてはならぬ。教師は子供を標準として教育すべく、子を眼中に置く可

きものではない。が、立法者、爲政家も亦それと同様に國民を見て民衆を見てはならないのである。國民の意志は常に同じい。國民は、思慮がある、恒心がある、而して、率直である、誠實である。然るに民衆は意志が定らない、自分が既に自分の眞意を知らないほどのものである。されば、法律は、概括的に國民の意志を表白したるものたるとは出来るが、民衆の意志を表白したる者たるとは出来ない。而して、また、さうあるのが至當なのである。所で、斯の意志は、衆庶が決して告白し得る所のものではない。聰明の士にして始めて識得しりえらるべきもので、而して、また賢者にして始めて適應するの途を知り、善人にして始めて擇んで従へるものなのである。



\* \* \*  
吾曹は決して自ら問うたことがない、何の権利があつて権力を帯びて居るのであるかと。吾人は唯統治するのみである。國民に吾曹を斥ける権利が有るか否か、吾曹は毫も考へたことがない。唯さういふ舉動を爲る口實を與へないやうに豫め備へるのみである。

\* \* \*  
假に死といふことが廢せたとすれば、どうかと云ふに、吾曹は別に反對を唱ふべき理由があるとは思はない。が、困難なのは、死刑廢止の一事であらう。假令廢した所で、暫時にして復活するのは明かである。

\* \* \*  
假令國家が死刑を科する権利を拋棄した所で、自衛の策を採るものが直ちに出て、殺戮に報ゆるに殺戮を以てしやうとする聲が熾んになるのは明かである。

\* \* \*  
法律はすべて老人と男子とで制定したものである。女子と青年とが變例を擇び、老人が定法を擇ぶのを見よ。

\* \* \*  
統治するものは、智者ではない、才智である。賢者ではない、智慧である。